

日本臨床試験学会 第15回学術集会

学生セッション●学生とプロフェッショナルで共に学ぶ臨床試験業界の人材育成

日本臨床試験学会初の学生セッションを開催して

昭和大学大学院 薬学研究科 臨床研究開発学分野

肥田典子

はじめに

2023年まで日本臨床試験学会(JSCTR)の学術集会総会において、学生を対象とした企画はなく、学生会員も少ない。2024年3月にコングレコンベンションセンターで開催された日本臨床試験学会 第15回学術集会総会 in 大阪(岩崎幸司会長)では、初めての取り組みとして「学生セッション」が開催された。本稿では、オーガナイザーを担当した筆者の視点から、実際に企画に参加した参加者のコメントも交えて、本セッションについて報告する。

1 企画から立ち上げまで

2023年学術集会総会終了直後から準備は始まった。

岩崎幸司会長、川口崇理事に加わっていただき、テーマ決めに着手した。学部や学年で知識レベルに大きな差があるため、学生に相応しいセッションを選定するのに苦慮した。そこで、①学生自身がこの企画に参加することで成長を感じられる、②人と人とのつながりがつくれる、の2点を軸として学生セッションのテーマを選んだ。「大学卒業後の進路」にフォーカスし、学生と企業やアカデミアとの接する場を提供し、学生のキャリア形成に役立ててもらうこととした。学生がひとりでシンポジウムの発表を行うことは難しいと予想されたため、4人ほどのグループでの学習、ディスカッションの様子を発表してもらうことを到達目標として設定した。

次に、対象となる学生の選定に取り掛かった。日本臨床試験学会の学生会員は、学部学生・大学院生もおり考慮する必要があるが、初めての企画であることから対象を限定し、発表者は「薬学部在籍する学生(大学院生を除く)」とした。本来であれば、広く全国から参加希望の学生を募るべきだが、大学間で実務実習や卒業研究

のスケジュールが異なることから、所属大学を限定して募集することとした。北垣邦彦先生(東京薬科大学)、平出誠先生(星薬科大学)、上田昌弘先生(摂南大学)、山崎太義先生(昭和大学)の協力を得て、16名(3年生1名、4年生11名、5年生4名)を確保した。実務実習や卒業研究が始まる前の3、4年生が参加しやすいようだった。

2 ファシリテータの募集

学生のみでは解決が難しい疑問が生じることが想定されたため、ファシリテータとしてデータマネージャー、モニター、生物統計家、CRC、スタディーマネージャーなどの臨床試験に関連する職種からGCPエキスパートを取得している方を各グループに配置することとした。佐々木哲哉氏(国立研究開発法人国立がん研究センター中央病院)、鈴木啓介氏(国立研究開発法人国立長寿医療研究センター)、田村祐子氏(NTTコミュニケーションズ株式会社)、長尾典明氏(日本たばこ産業株式会社)、成田さわな氏(長崎大学病院)、桃井章裕氏(慶應義塾大学病院)、梨本真広氏(エイツーヘルスケア株式会社)、小山田隼佑氏(NPO法人JORTC)にご協力いただいた。ファシリテータのなかには、普段学生と接しない方も含まれていたため、学生との交流をととても楽しみにしている印象であった。

3 グループの立ち上げと発表準備

準備開始から4か月経過した2023年8月ようやく、学生も含めたキックオフミーティングが開催された。顔合わせの後、グループに分かれて活動を開始した。学生グループは、大学・性別・学年を考慮し、なるべくラン

First-Ever Session by Students at a JSCTR Conference

“Students and Professionals Learning Together to Develop Human Resources in the Clinical Trial Industry”

Noriko Hida: Division of Clinical Research and Development, Graduate School of Pharmacy, Showa University



図 1 学生セッションでの発表の様子

表 1 学生セッションの感想

	楽しかったこと	難しかったこと
学生からの意見	- ファシリテータから、専門的な知識の獲得できたこと ○大学の授業で習わないことや臨床開発ならではのキーワードを学ぶことができた。 ○現場のことを少し知ることができた。 - 他大学の学生との交流 ○他大学の学生の考え方を知り、新たな知識を身につけられた。 ○学生同士で発表をより良い方向に持っていこうと高めあった。	- 対面でのコミュニケーションの不足 ○すべてオンラインでの会議だったため、世間話を通じて仲良くなる過程が少なく、もどかしい感じがした。 - 予定調整 ○先生方と予定を合わせるのが難しかった。 - 少ないミーティング回数で意見をまとめること ○発表の練習をもっとしたかった。
ファシリテータからの意見	- 学生の着眼点・興味 ○自身が当たり前とおもっていることも、学生にとって当たり前でないことを知るたびに新鮮な気持ちになった。 ○学生の臨床研究に対する視点が興味深かった。 ○学生が臨床試験業界への興味や疑問を素直に教えてくれたことが嬉しかった。 - 学生の成長 ○発表の準備のプロセスに学生と一緒に関与でき、楽しかった。 ○最初は発言の少なかった学生が少しずつ発言してくれるようになり、嬉しかった。	- 学業プラスアルファの活動の負荷 ○学生にどの程度の課題をだしてよいのか判断が難しかった。 ○成果物のクオリティをどの程度求められているかが明確でなかったため、準備期間中は心配だった。 ○学生の準備の状況、忙しさ、やる気を探るのが難しかった。 - 予定調整 ○学生と予定を合わせるのが難しかった。

ダムになるように筆者がグループ分けを行った。

初回は川口先生と筆者が「治験や臨床研究に関して、疑問に思っていることをファシリテータの先生方に聞いてみよう」、「ファシリテータの先生が普段どんな仕事をしているのか聞いてみよう」という話題を提供したものの、その後のディスカッションについては、各グループにゆだねた。各グループで月1回の頻度でディスカッションを重ね、テーマを絞り、議論を深めていった。シンポジウムで取り扱うテーマは学生たちの興味があるものを選択し、2つのグループが「ドラッグ・ロス」、その他のグループは「国際共同治験」、「臨床試験の負のイ

メージ」を選択した。最初は緊張していた学生たちも、積極的に発言し、学生の意欲の高さにファシリテータ・コアメンバーも一同感心させられた。学生、ファシリテータともに参加する地域がバラバラであったため、すべてオンライン上で行われた。

抄録を作成し、演題を登録するのも学生にとっては初めての作業。筆者らの心配をよそに、学生同士で抄録の草案をまとめ、スライドも自主的な打ち合わせで作り上げていた。ファシリテータは内容をチェックする程度であり、筆者もファシリテータも学生のレベルの高さに驚くばかりであった。

4 いよいよ当日

学生セッション（図 1, 前頁）は金曜日の午後。同日早朝に東海道・山陽新幹線内での人身事故の影響で、新幹線が運転見合わせとなるハプニングがあったものの、全員集合することができ、発表を迎えることができた。どのグループも自主的なミーティングを行い、発表のために練習を重ねていた。スライドの出来栄は大人顔負け。直前まで緊張すると言っていた学生たちも、舞台上では自分の思いをしっかりと表現していた。参加した聴衆からは、学生とは思えないほど立派だった、素晴らしい。優秀な学生ばかりだった、是非一緒に働きたいなどの言葉をいただいた。

筆者は、学生ならではの着眼点がユニークであり、既存の議論とはまた違う観点から課題解決を図ろうとしている点が印象に残った。

5 全体を振り返って

学生セッション終了後、学生とファシリテータから今回の企画についてフィードバックをもらった（回答数 18 名：学生 10 名、ファシリテータ 8 名）。学生セッション

へ参加したことの満足度は 92.6 点（最高点：100 点，最低点：60 点）であり，非常に高い満足度であった。今回の学生セッションに参加して楽しかったこと，難しいと感じた点をまとめた（表 1, 前頁）。学生・ファシリテータともに，交流により新たな知識や着眼点を共有できて有意義であったと評価する一方で，予定の調整が難しかったと回答していた。特に学生は，対面でのコミュニケーションが少ないなかで，合意形成に至らなければならない点が難しいと感じていたことがわかった。

今後も学生セッションの開催をのぞむ声は学生，ファシリテータの双方からあげられている。改善点として，対面でのコミュニケーションの機会をつくること，大学教員をオブザーバーにするなどの工夫が求められる。また，優れたプレゼンテーションへの表彰制度も検討してもよいかもしれない。

最後に，将来の臨床試験業界を担う学生が学ぶ場を提供して下さった代表理事の山口拓洋先生，会長の岩崎幸司先生，今回の企画を進めるにあたって企画段階から当日の座長までサポートいただいた川口崇先生に心より御礼申し上げ，学生セッションの報告とさせていただきます。